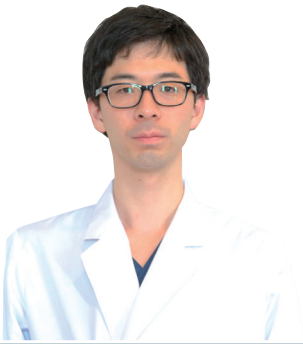
BPSDってなに？

社会医療法人全仁会　倉敷平成病院　脳神経内科
小坂田　陽介



認知症の症状は、中核症状とBPSDの大きく二つに分かれます。

■中核症状

中核症状とは脳の神経細胞が壊れることによって直接起こる症状です。具体的には、物忘れをはじめとする記憶障害。料理が出来ない、計画的に物事がこなせないなどの実行機能障害。いつ・どこかが分からなくなる見当識障害。服がうまく着られないなどの失行があげられます。認知症になると誰でもこれらの中核症状が出現してきます。

■BPSD

一方BPSDとは「認知症の行動と心理症状」を表す英語の「Behavioral and Psychological Symptoms of Dementia」の頭文字をとったものです（難しいですね）。周辺症状とも呼ばれています。具体的には興奮状態になり暴力や暴言が出てしまう、自分を責めたり絶望を感じて抑うつ状態になってしまう。外に出て行って迷子になってしまう徘徊、取られていないのに物を取られたと思い込んでしまう、物取られ妄想。その他、不眠や昼夜逆転、介護の拒否など様々で、これらはすべてBPSDです。BPSDは中核症状のために本人が混乱したり落ち込んだりした結果起こるといわれています。

BPSDには本人を取り巻く環境や人間関係が大きく影響するといわれています。そのため、BPSDは中核症状のように必ず出現する症状ではなく、個人差が大きくなります。周囲の環境や人間関係が好ましいものでない場合、本人のストレスが高まり、暴言や暴力、徘徊や妄想などにつながります。BPSDは認知症患者さんが辛いだけでなく、周りの家族や介護者にとって非常に大きな負担となる症状です。しかし、これらBPSDは周囲の対応次第で改善することが期待できるともいわれています。逆に中核症状に関しては、脳の障害が直接の原因で起こっているために改善は難しいです。

具体的なBPSDのケース

●物とられ妄想

認知症の人が物をなくした場合に、身近な人に「あなたが盗んだでしょう」と疑いをむけることがあります。「物とられ妄想」といいます。一見、自分の行為を忘れてしまって人に疑いを向けているという記憶障害、すなわち中核症状による症状にみえます。しかし、物取られ妄想の背景心理には思い通りにいかない焦り、周りとの関係がうまくいっていないことへの反発心から生まれくる、被害意識があるといわれています。また健康な人なら何度も金銭や、通帳を確認することがないのに認知症の人はそれをしてしまう。そんなことをしないと心が満たされない気持ちに陥ってしまっているのです。出来ないことを頭ごなしに否定せずに、大切なものがなくなった本人の気持ちになって耳を傾けると、「周りも心配してくれる」など完全に疑いが晴れなくても盗んだとまでは言わないケースもある様です。

●徘徊

徘徊はBPSDのなかでも関心が高い症状で、認知症の人の列車事故の際は大きな社会問題にもなりました。徘徊してしまう原因は一見、買い物や散歩に出かけたつもりが、場所や時間が分からなくなってしまったという、中核症状のように思えます。しかし、その背景には、寂しさから友人に会いたい、家庭での居心地が悪く気晴らしに散歩するという心理状態があるといわれています。認知症になると、そう言った気持ちを言葉にすることがなかなか難しくなってきます。一度、話をよく聞いてあげることで解決の方法が見つかるかもしれません。

上記以外の対応として、体を動かす運動療法、歌や楽器を楽しむ音楽療法、懐かしい写真をみて昔を語り合ったりする回想法などの非薬物療法があり、主にデイサービスなどで行うことができます。もちろん薬物療法もありますが、薬の副作用で元気がなくなってしまったりすることも少なくなく、闇雲に薬をつかえば良いというわけではないと思います。

以上、認知症の中核症状とBPSDについて簡単に書かせて頂きました。言葉で書くことは簡単ですが、どれも実践することは容易いことではないと思います。ただ、少しでも病気の背景を知っておくことで、何かいつもと違った対応が認知症で苦しんでいる患者さんにできたらいいなと思います。